Finger Painting による遊戯療法の過程分析の一研究

丸　井　文　男　　蔭　山　英　順*

Ⅰ　はじめに

児童画に関する心理学的研究では，児童画における線，形，色彩，空間の使用というような指標と性格との相関に関する研究が主になされており，臨床心理学の領域においても，その相関から診断を行なっていこうとする研究が多く見られている。それ等の研究には Rambert, M.L.(1947),[1] Alschler, R.H. 等 (1947),[2] Hammer, E.F. (1958),[3] 浅利 (1956) [4] など研究がある。しかし霜田 (1963) [5] がそれらの研究に対して「普遍的な解釈を頭におきながらも，それを描いた個人的な象徴の意味を知ることによって初めて妥当な解釈ができるのである。」と警告を与えており，　Alschlar, R.H. 等 (1947) [2] 自身も「描画の諸特徴と外的行動とを直接的に結びつけてしまうことは危険であると同様に，児童画の表面的な特徴と結びつけることも十分注意する必要がある。」と述べている。このように診断的な立場に立っていく場合にはまだその診断的解釈的方法に問題は存在しているが，臨床的意義についてはそれなりの成果は充分認めなければならないであろう。しかし著者等はこのような児童画の診断的な立場，つまり児童画の静的側面よりもむしろ動的な描く (*Painting*) こと自体の内的動きへの関心があり，その行動に治療的な意味をみとめそれを検討しようとするものである。

Rambert, M.L. (1947) [1] によれば，「子供に絵を描かせることは，意識下に閉じこめられた感情の解放として役立つ。そこでカタルシスとしての効果をあげることができる。絵を描くことによって，子供の本能的意欲は昇華せられ，葛藤は次第に解消されるようになり，不調和なところも調整されてゆく。このような意味で児童画は治療のためにも教育のためにも重要な意義をもってくるのである。」とその治療的意義を述べている。

本研究の主題である Finger Painting は Napoli, P.J. (1946) [7] によれば，1931年2月，イタリアのローマで Show, R.F. によって幼児教育の1つの試みとしてはじめられたものであり，彼女によって世界に宣伝され，現在広く用いられている。この Finger Painting に関する研究の代表的なものとして Arlow, J., 等 (1946)[6], Napoli, P.J., (1946) [7] が見られ，わが国でも宮武 (1952)[8], 石井 (1955)[9], 中西，等 (1955[10], 1957[11] 1958) [12] がある。代表的なものは Napoli, P.J. のモノグラフであり，彼によって，その技術が整備された，これらの研究においても診断技術としてのその研究に重点を置く人と，心理治療としてその研究に重点を置く人に分れるが，前述したように著者等は後者の立場，つまり治療的な立場に立ち遊戯療法の1つの道具として見ていこうとするものである。

Ⅱ　問題および目的

Finger Painting の治療的な有効性は第1に Painting そのものに見られ，client が Painting することにより，内的な感情を自由に表現し，結局カタルシスの役割を演ずるとみることができる。　第2に Finger Painting は素材の性質から見て非常に可塑性に富んでおり，　client の構えの変化により painting という次元から playing へ移行しやすく，painting 以上に「その素材によって遊ぶ」ということに大きな，また直接的なカタルシスを得やすいということである，このような治療的意味を持った Finger Painting による遊戯療法の研究が少く，それによる治療過程の検討が十分になされていない。そこで本研究は Finger Painting を主とした遊戯治療の過程を，client の Finger Painting へのかかわり方から検討し，又他の play との関係をも検討し，治療の展開と Finger Painting の展開の過程の関係分析を目的とするのである。

*　大学院（博士課程）

Ⅲ 方　法

Finger Painting を遊戯療法に導入する場合に問題となるのは，Finger Painting だけで治療をしていくか，それとも Finger Painting を治療場面において他の道具と等価に置くかどうかの問題がある。著者等の立場では Finger Painting を他の遊具と等価に置き，基本的には来談者中心の遊戯療法を行ない，Finger Painting が play の場面で選択されるかどうかの決定は client 自身がなすものであると考えている。

本研究に用いた Finger Panting は paint としては，まずメリケン粉をうすめにたいて糊を作り，これにポスターカーをまぜて，洗面器に分け，冷却してかためる。用いた色は赤，黄，青，茶，黒，緑，白の七色である。紙はケント紙の110cm×80cmの大ささのものを用い，client の要求のある時は何枚も与えたり，かつ小さくしてやったりした。その紙をベニヤ板の上に水張をして固定する。その他手洗用のナベ，雑布，を用意した。エプロンは client が要求した時のみ与えた。Finger Painting に関するインストラクションでは初回（治療経過からは第3回目）に次のように与えた。「ここでは好きなように遊んでいいし，あなたの使いたいものを自由に使っていいんだよ。又これを使って好きなように遊んでもいいよ。」と paint を示してインストラクションを与えた。

なお，治療過程の分析は，品瀬ら（1963）[13] の遊戯療法についてのスケールを用い，遊戯治療全体の展開過程を客観的に押えることを試みた。

今回は，学校緘黙症の一事例について，遊戯療法のなかで Finger Pinting を挿入し，それによって，過程分析を行なった。

Ⅳ 分析対象事例の概要

本事例は来室時6才7カ月の女児。（K. M）小学1年，母親によれば，学校ではカタツムリみたいに運動神経がにぶく，挙手もしないし，友達もできず，ほとんど学校で口をきかない。しかし家ではカタツムリのようなことはまったく無く，話も普通にするので困ることはないという。このような学校場面における不適応を主訴とし，教師から当クリニックへ紹介されてきたケースである。家族は名古屋市のK団地に住む中流家庭であり，家族構成は Fig 1 に示すようである。父親はT自動車会社の工員，妹は幼稚園に行っており，妹には主訴のような不適応は見られない。本児の主なる生育歴は妊娠中，異常無し，出産は鉗子分娩。首のすわり，始語，始歩は正常であり乳幼児期における発達の遅滞は認められない。母親の養育態度は晩婚であったためか妹の出生まで常に抱いて寝たり，どこに行くのも連れて歩いたりして，溺愛的な養育態度であった。しかし妹の出生により本児が放置されるようになり，本児が3才の頃，昼間に失禁が連続し，3カ月ほどつづいたことがあり，母親は叱ることが多くあった。この頃から母親の養育態度の変化が見られ，放任および消極的拒否の養育態度に変化したものと思われる。幼稚園へは2年保育で入園し，入園式の日は母親と分離はできなかったが，翌日からは一人で登園。幼稚園時代は教師にくっついていて一人で遊ぶことができず，しかし，先生にもほとんど喋らなかった。絵はほとんど無彩色の絵で，他児との区別が母親にすぐできる程であった。もちろん友達もできず，常に一人であり，家庭では妹とばかり遊んでいた。最近は家庭では妹と比較して口数がすくなく，テレビなどを見てもあまり笑わず，寝る時は人形をフトンの中に入れ，一人で人形と対話をしている。母親との心理的な関係においても，母親自身の言葉を借れば「叱ってもあやまらなく，ずぶとい」といっているようにすなおな感情の表現をなさず，その関係の悪さが見られ，母親が「子供の寝ている顔を見て，昼間あんなに叱らなければよかった。寝顔は子供だなあ，と感ずる。」と述べているように母親の叱り方は叱る時に感情的になり，子供を自己と対等に置いて叱ってしまっていることがわかる。さらに「私はこの子を褒めたことがなく，褒めるなんて，照れくさくてできない。」というように本児は母親との関係において，受容されたという体験がすくなく，そこで充足されない欲求を人形との対話という形で，つまり空想の世界の中で充足しているものと思われ，家庭においても感情の表出が十分になされていないことがわかる。

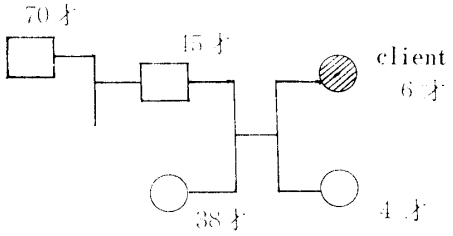


Fig 1　家族構成

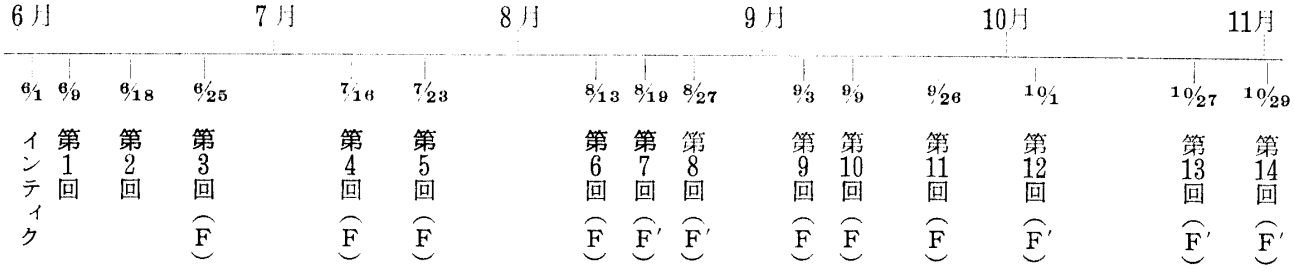
Ⅴ 治療方針および治療経過

Ⅳで述べたように，本児の問題は学校場面に必ずしも限定されておらず，母親との関係においても感情の表出

が充分でなく，情緒的な安定が得られていない。したがって本児は受容体験が少くなく，情緒的な統制が過剰であり，その意味で情緒発達が未成熟な事例と考えられ，情緒的な解放と受容体験を遊戯療法により持たせてやると同時に，母親へのガイダンスにより養育態度を変えることが必要であろうという方針により治療を開始した。その経過は Fig 2 に示す通りである。

Finger Painting は第3回から挿入，準備し，いつでもやれるようにしておいた。

Fig 2　治療経過



図中の括弧内のFは Finger Painting を行った回，F′は Finger Painting は行わなかつたが paint へのなんらかのかかわりの見られた回を示している。

各回における詳細な検討は以下に述べる。

治療場面全体の経過	Finger painting の経過	家庭および学校における症状の変化
第1回 play room（以下P.R.）へ入るのに母親との分離不安は少しも見られず，「この部屋はKちゃんが自由に使ってもいいし，何をしてもいいんだよ。」という therapist（以下T）の導入後，すぐボールを持ち出して一人で遊び始め，Tにはまったく無関心である。シロホン，輪投，黒板，ボーリング，卓上ピアノと次か次へと移り，一つの遊びに集中できない。ボーリングのところでは，ぬいぐるみの犬に玉やボールを当ててはボールから落し，落ちるたびに少し笑顔を見せたり，Tに何か言って欲しげにチラッと見る。「犬が落ちちゃったねえ。」といってやると満足したように再三再四行う。後半になって別なケースの Finger Painting（以下F.P.）を見つけ，それを手掌で撫でまわしているので，クレヨンを出してやると，黙って受けとり，描画に夢中になり吹笛を吹きながら描きつづける。描画中はTの存在をまったく気にかけている様子もなく黙々と描いている。最後まで緘黙の状態。（写真Fig.3参照） 〔Client（以下C）の動きは堅く，小さい。そしてC側からのTへの働きかけはなく，P.R.の場面の自由さの認知が後半になってもできていないが，所々にTの方をチラッと見たり，ニッコリとしたりする動きからはTを吟味している段階と思われる。〕	（F.P.の準備無し。）	
第2回 母親，妹とCの三人で来所し，待合所で妹とはしゃぎまわっている。play を開始してからは，まだP.R.になじめないらしく，部屋の中を見まわしたりしてから，三輪車に乗り，あちらこちら乗りまわしている。ママごとの道具を見たり，三輪車でボーリングのピンを倒したりしていて一つの遊びに集中できない。そのうち縄とびを見つけ，とび始めるが長すぎてうまくとべない。とべなくなるとチラリとTの方を見る。短かくしてやると色々なとびかたをして見せてはTの顔を見てニッコリする。このように言語的な働きかけはまったく無いが，Tに関心を示し，消極	（F.P.の準備無し。）	学校における行動にも，家庭での行動にも以前とあまり変化はない。しかし近所の人は「この頃，Kちゃんは明るくなった」という。

治療場面全体の経過	Finger Paintingの経過	家庭および学校における症状の変化
的な行動ではあるが少しずつ働きかけの増加が見られる。後半になって電気機関車を引っぱり出して来て，「これで先生遊ぶ。」と始めて自発的な言葉による意志表示をもたらし，使い方を説明してやると，ニッコリとし，自分からレールを持ってきてそれをつないでいく。その間，「先生，この線路こわれている。」とか「たくさん線路があるね。」と，かなり積極的な働きかけをもってくる。さらに終了近い時点ではTに対して「電気を入れて。」という。〔Tとの関係の吟の段階から一歩出た，積極的な働きかけが見られた。〕		
第3回 playを始める前にP.R.に入りこんで来て，TがF.P.の準備をしている所に来て，paintの入ったビニール袋からpaintを出しては，「きもち悪い。」といいながらpaintをつっついている。playが始まってF.P.の説明をしてやるとうなづき，紙の準備，水張りもTの後にくっついて手伝い，抵抗なくF.P.に入る。1枚目は道，空，黒で人の顔らしいのを描いていた。この時点で手掌（片手）を紙面にぴったりくっつけてpaintを延ばす動作が見られた。2枚目は「もう一枚描く？」というTの働らきかけで，うなづき，紙を半分にして描く。海に船が黒い煙を出している所の絵である。又この2枚ともかならず黄色の太陽を描いているのは印像的である。2枚目の終了近くになってpaintがなくなり，からになった洗面器を見せてはニッコリとする。又paintを手のひらの上でまぜ合わせたり，指で手のひらの上のpaintをつっついたりするような動作が見られる。3枚目は下に道を描き，真中に大きな茶色の家，道の上に種々な草花を描いていたが，そのうち手掌をぴったり紙面にくっつけ，両手で紙面をこするようになり，手の運動を楽しんでいるが，その間Tへの働きかけ，およびその時の感触についての表現がまったく見られない。3枚目の後半ではpaintが水の中に落ちるとキャーとはじめて明るい顔で声を出して笑う。	(Finger Paintingをはじめて準備) F.P.の素材そのものへの強い抵抗は見られず，初回ということからか，Tのリードにより場面が展開している。CはTの後についていっているという状況である。それは描き終ったと思われる時にTが終了を聞いてやらないと，ボーッとそのままの状態であったり，終了を聞いてやるとうなづくだけである。paintも最初に配置された場所をくずすことなく，遠くまで行ってはpaintを持ち帰っているという行動が見られる。F.P.そのものも遊び，というよりも「絵を描く」という枠から出ていなく，3枚とも具象的な絵を描いている。描画中の動作においても指によるぬりつけ（smearing）が最初は見られ，そして1枚目の後半においては，ごしごしこする動作（scrubbing）が見られる。その運動範囲は狭く，又弱々しい。F.P.を通してのTとのかかわりは，空の洗面器を見せたり，Tの働きかけにうなづいたり，paintが水の中に落ちた時に「キャー」といってチラッとTの顔を見るような，まだ少し防衛的な，こだわりのあるものが見られる。この回はすべての時間がF.P.であった。 （写真Fig.4参照）	家では前よりも少し明るくなり，よく喋るようになった。友人もでき，ほとんど毎日，暗くなるまで遊んでくる。遅くなると「ママ，遅くなってごめんね。」とCの方からいうようになった。しかし，まだ父親の方には甘えてベタついているが，母親の方にはベタついていかない。学校の様子は以前と変っていない。

治療場面全体の経過	Finger Painting の経過	家庭および学校における症状の変化
〔ラポールは完全についたようにTは感じたが，Tに対する言語的な働きかけは見られず，又非言語的なものにおいても，その動きは小さく，ためらいがちであり，堅い殻から一歩出ようとしているが，そこにまだためらいの見られる段階であろう。〕		
第4回 P.R.に入るとすぐシロホンの方に行き，Tの「今日もこれ(F.P.)をやろうか」という導入で拒否することなく「うん」とうなづく。前回と同じように1枚目は茶色で下の方に道，真中に大きな家を描く。道の上に草，赤い花，黄色い小鳥，黄色の蝶，青い空を描き，空は手掌で拡げる。遠くにある paint は手元にもって来るなどして，かなりF.P.に involve している。2枚目では自主的に手洗い用の水を替えに行ったり，紙の準備も手伝ったりして，主体的な動きが出てくる。2枚目は海と船を描く。1枚目も2枚目も描き終えたことをTに告げることができず，じっと紙面をにらんでいたり，窓の外を見たりするようなもじもじした行動が見られる。F.P.終了後，黒板へ人の顔，黄色の大きな太陽を描く，そしてママごとの道具を見たり，シロホンをたたいてみたりして終了する。 〔今回も依然としてTへの言語的な働きかけは少ないが，F.P.の中に準備のところでは自主的な行動が出てきており，自己の殻を少しずつ開きかかっている段階と思われる。〕	(援助されての具象的なF.P.) F.P.へのとりかかりはTのリードで「うん」とうなづいて入り主体的にF.P.にかかわって行こうとするところは見られないが，2枚目に移る時には自主的に水をかえたり，紙の準備をしたり，遠くの paint を近くに持ってきたりしているが，まだ描画の終了はTが聞いてやって，「うん」とうなづいたり，聞いてやらないともじもじしていて，2枚目ではやっと小声で「終り」といえる段階である。したがって，やや自主的な動きがF.P.の中に見えてきた段階と見てよいであろう。描画中の動作は先回と変化なく，指でぬりつける動作とごしごしこする動作が見られるが，まだそのその運動の範囲も狭く，動きも機敏性に欠け，自由さが無い。F.P.そのものへの構えも指と筆と変っただけで，まさに描画という構えであり，具象的なものを描いている。F.P.のplayの中で占める時間は全体の⅔がそれに当てられており，後半には別な play へ移っている。(写真Fig.5参照)	学校では相変らず，挙手をしたり自主的に話をすることはないが，必要なことは先生に話すようになった。以前は小さな字を書いていたがノートを見ると大きく，乱雑な字になった。学校での様子はほとんど母親に話さないことは変りない。
第5回 play に入ってすぐ三輪車に乗りP.R.の中をぐるぐる回っている。そして指先で paint をつっついたりしていて，すぐにはF.P.に入らない。片手にいっぱい paint をつけたり，各指に色々な色をつけて楽しんでいる。Tの指についた色をとろうとしたり，Tの手に色々な色の paint をたらしたりするようなTに対する接近が見られる。そして両手いっぱいに paint をつけて，こねまわしたりしている。Tの「今日もこれやる？」という導入で手を洗いに行き，手洗い用のナベを頭にかむっ	(具象的なF.P.) F.P.への入り方は，前2回についてはTのリードで比較的抵抗なく入ってきたが，今回はその前段階として，指先で paint をつっついたり指に色々な色をつけたりしていて紙面上に入る前の抵抗が見られ，又その時間が長い。その間にTの手に paint る垂らしたりするような積極的なかかわりがみられ，Tの顔をチラッと見る段階から比較すれば，より接近した動きと見てもよいであろう。描画中の動作では，1枚目は右人差指で paint を少しつけてはぬりつける，右手指5本を使って，さら	妹が居る時は，母親に非常に甘えてベタつきたがるが，しかし一人になるとベタついてこない。

治療場面全体の経過	Finger Painting の経過	家庭および学校における症状の変化
たり，かむったナベをポンポンとたたいたりするようなふざけを見せたりして，自分からF.P.の用意する。1枚目は右手人差指にpaintを少しつけ紙の右下端からぬり出す。右手指五本を使い，さらに手のひらでpaintをのばす。手掌を使って船の輪郭をとる。途中で「便所へ行ってくる」といってP.R.を出る。帰室後，紙の下端を折ってみたり，めくってみたりしている。どうも終了らしいがTに終了を告げることができず，もじもじしている。Tが「終り？」と聞いてやると，「うん」とうなづく。「もう一枚やる？」「うん」というように動きはTのリードを待ちがちである。2枚目は右手人差指で星を描き，さらにpaintの中に両手を漬けて手のひらで手形を作る。paintを洗面器の中で混ぜたりする行動が見られ，又手を洗いながら水を指ではじいたりするようないたずらが見られる。2枚目の後半は洗面器から直接紙の上にpaintを落すような行動も見られる。2枚目も終了を告げることができないらしく，足を組んだり，足にpaintを少しつけてはこすったりする行動も見られる。Tが待っていると小声で「できちゃった」というような消極的ではあるが自己表現が出てくる。 「今回はF.P.が中心のplayであったが，2枚描いた後，ピストルでTとの打合い，輪投げがその後行われ，終了近くになって輪投げの輪からTの方をのぞくようなふざけが出てかなり自由な動きが出かかってくる。」	に手掌の全面でpaintをのばしていく，というように1枚のF.P.の中でも動きが大きくなっていっているが，まだ終了が告げられず，紙の下端を折ったり，めくったりする動作が見られる。2枚目では手のひらの手形をつけたり，洗面器の中でpaintを混ぜたり，paintを直接紙の上に落すというような動作が見られ，描画という枠から何か一歩出たいのであるが，完全に遊びまでに至っていない。今回も約⅔がF.P.であり，後半になって別なplayに移っており，そこでの情緒的な表現はF.P.より多くなっている。 （写真Fig.6Fig.7参照）	
第6回 今回は自主的にF.P.の用意をし，1枚目は指先を全部使ってぬり，さらに両手の手のひらで紙面全体をぬる。しかし。まだ積極的に終了した事をTに告げられず，もじもじする。2枚目も水の取替えを自分で行い手のひらの跡ををつけている。2枚目は何か具象的なものを描くというよりもpaintによって遊んでいるという感じである。しかしその間にTに働きかけるとか，ふざけがあるというような自由さにやや欠	（遊びへの移行期におけるためらいのF.P.） 今回はF.P.へTのリード無しで入って行き，準備はすべて自主的に行う。しかしまだ終了は積極的に告げることができない。1枚目は具象的な絵であるが2枚目は先回の2枚目と同様に手のひらの跡をつけるというやや消極的ではあるが，「遊び」というものになってきている。しかしpaintを自分の手や腕につけて遊んでいる時間が長く，Tとの関係で基本的な情緒表出の点では変っ	ていない。F.P.の時間は約⅔であ 特記すべき変化無し。

治療場面全体の経過	Finger Painting の経過	家庭および学校における症状の変化
け，黙々とそこに一人で遊んでいるという感じである。それはpaintを手につけて遊んでいる時間が多く，動き自体として小さな弱々しい所が見られる。約30分でF.P.を終了し輪投げを持ち出してきて，自分で黒板に得点表を書き，ゲームを始める。Tをその中に入れようとする動きはまったく見られない。 〔先回の輪投げよりも，輪からのぞいてニッコリとしたりするような感情表現が豊になってきており，又多く見られる。Tの働きかけにも反応があり，「ちがう」とか「4点だ」とかはっきりした反応が返ってくる。F.P.よりも輪投げの中の行動にCなりの比較的自由な感情表現が多く出かかっている回である。〕	り，後半になって別なplayに移っており，そこではCなりの比較的自由な感情表出があり，言語的な表現も出かかっている。	
第7回 playを開始してすぐに輪投げを持ち出し，F.P.にはまったく触れようとせず，得点表をCとTの二人分を作りながら「先生もやろう。」Tをゲームに入れる。Tが失敗するかどうかを非常に気にしている様子で，失敗すると「キャー」というような大きな声を出して喜ぶ。C自身がやる時は非常に慎重であり，二人の得点を気にしている。今回は大部分の時間が輪投げであったが，終了近くになってF.P.のpaintに触れすべての洗面器に入ったpaintをかきまわしている。そして時々チラリとTの顔を見ていたが，Tの腕にpaintをくっつけに来る。そして「ついちゃった」「つけちゃう」といってくっつけては喜んでいる。 〔今回は終了近くになって，Tに対してやや攻撃的ではあるが，積極的なかかわりを持ってきており，動きも大きく，比較的自由な感情表出を行動に出している。又言葉による表現もやや自由さを欠くが後半になって感情表出が多くなってきた。〕	（F.P.からの逃避） 今回は従来のようにF.P.に前半が使われず，F.P.にはまったくかかわらずに別なplayに入ってゆき，後半の10分位の時間にpaintへのかかわりがあった。洗面器の中をかきまわしたり，paintをTの腕につけてくるというような，むしろ紙面とのかかわりから離れてpaintを通して積極的にTとかかわってきており，TとCとの交流の媒介をpaintがなしている。まだややためらいはあるが，比較的自由な感情表出がpaintを介して見られた回と見てもよいであろう。F.P.そのものは今回はなされなかった。	特記すべき変化無し。
第8回 playが始まると輪投げを持ち出し，得点表を作り，輪のそれぞれに名前を付ける。赤には「あかこさん」「あっちゃん」「あきおくん」，黄には「きいこさん」，青には「あおのくん」，桃色には「ピーこさ	（F.P.への拒否反応） F.P.は最後までなされず，paintを別な目的にこの回は使用している。つまり輪投げの輪を叱りつける又罰する道具として使用している。その意味からゆけば素材を自由に使いこなし，こだわることなくCなり	8月24日，25日と2回つづけて夜尿があった。家庭で特別変った事件は無し。

治療場面全体の経過	Finger Paintingの 経過	家庭および学校における症状の変化
ん」「ピンくん」，緑には「みどりさん」というように命名し，「入れよ」と命令しては投げ入れ，的からはずれると，「だめじゃないの，ちゃんと入らなくちゃ。」というように叱ったりする。そのうち「ダメ」といって輪を足で踏みつけたりして，輪に対して強い攻撃的な面を見せる。又Tの投げた輪にも厳しく叱りつけ，幾度も足で踏みつけたり，床にたたきつけたりして，その輪を叱りつける。後半に入ると用意してあったpaintの中に漬けてしまう程の情緒的なものを直接に出してくる。Tとの関係においても，自由に動いている。 Tの輪に対しても「だめじゃないの先生のいうとおりにしなければ」というように，輪投げの輪を通してCの自由な感情表出と，今まで抑圧されつづけた感情が一度に流出し充分にカタルシスのなされた回と見てよいであろう。	のものにしてしまっていることになるであろう。同時に6回までCがなしてきたF.P.に対する消極的な拒否とも考えられるであろう。	
第9回 playが始まると両親の顔，妹の顔を描き，その後輪げを引っぱり出して得点表を作り，1回目はCだけでゲームをやり，「入ったね」とか「はずれたね」とTの承認を求めてくる。2回目からはTもゲームに導入し，得点表にTの名前も入れて始めるが，途中で「先生のもっとおもしろい名前にしよう」といって「ぶた先生」「かばぶた先生」「ばかぶた先生」「おねしょ先生」と名前を変えては笑いふざけている。大きな声を出して笑うのは今回が初めてである。この2回目の輪投げはP.R.を自由に，そしてTに対しても感情を自由に表現している。この所までで約40分であるが，輪投げを終えて周囲を見まわし，「まだ先生時間ある？」と問い，10分あることを告げてやると，タッパウェアーに入ったpaintをいじくり，「これで先生遊んでいい？」と問い返してくる。紙を出してやると，待ちかねたように紙の上に緑をタッパウェアーから直接全部あけて，両手でぬたくりをして，Tの顔を見て，「おもしろい」という。さらに茶色を混ぜ，紙の上でこねまわしている。「変な色にな	（F.P.へのとけこみ） 第7回，第8回とF.P.そのものは行わなかったのであるが，今回は終了間近の10分位の所で，Cの方からpaintを遊びの道具として使っていいか，という承認をTに求めてくるという主体的な動きが出て，8回までのF.P.に対する認知とまったく異ったF.P.の認知がなされ，そのF.P.の内容もタッパウェアーの底で撫でまわしたり，ベニヤ板の上をすべったり，遊びの中に独創的なものがもたらされ自由な，そして大きな動きを見せている。さらにそこでの体験を明確にTに伝えており，伝えることの喜びをCなりに全身で表現している。当然なことではあるが，終了した絵をとまどうことなく自主的に始末し，柔軟性に富んだ主体的な動きが見られる。短時間ではあるが計4枚の紙を用いてpaintを遊びの道具として用いている。 （写真Fig.8Fig.9参照）	Cは毎日よく遊び，家にも友人が遊びにくる。そして母親のいうことを全然聞き入れようとしない点が目立ってきた。

治療場面全体の経過	Finger Painting の経過	家庭および学校における症状の変化
った。これで遊ぶのおもしろい。」と非常に楽しそうにニコニコしてやっている。動きも大きく，さかんに楽しいということをTに告げる。2枚目をTに要求し，ぬたくりをして，紙をひっくり返して，「きれいな模様ができた。」といって喜ぶ。3枚目はpaintを紙にたたきつけ，パッとpaintが飛び散るのを喜び，再三再四行う。3枚目も同様である。4枚目はタッパウェアーの底で紙の上を撫でまわしたり，ベニヤ板の上にpaintがくっついて滑るので，その滑りを楽しんでいる。 〔F.P.を使って独創的な遊びを発見し，その喜びをどう表現していいのか，夢中になってそのpaintと大胆に遊んでいる。〕		
第10回 playからすぐにF.P.に入り連続して10枚行う。初めの2枚目はタッパウェアーから手でpaintを取り出し，紙の上に山盛りにして，そのpaintを両手いっぱいにすくいあげ，紙の上にたたきつける。3枚目は2色を紙の上に乗せてタッパウェアーで少し混ぜ，それをすくいあげて紙にたたきつける。今回は「終り」ということも告げずに，どんどん自分で片付け，新しい紙を取りに行き，再びF.P.を始めるというようにF.P.の中に溶け込んでおり，その行動にはとぎれることなく，楽しんで夢中になっている。5枚目からは洗面器に入ったpaintを紙の上にあけ，洗面器で紙面をこする。この頃から描きあげる度にTの方に作品を持ってきてpaintをくっつけようとす。又空になった洗面器をTの方に投げつけたりするような攻撃的な行動も見られる。このようにして10枚を30分位でpaintを全部使って遊ぶ。paintがなくなって，「輪投げをやろうかな」といって持ち出してき，二人の得点表を作り，今回はCの輪が全部入らなくても満点をつけたり，Tの得点を0にして喜ぶ。しかし輪投げも途中でやめてしまい，椅子の上に登ってTに飛びついてくる。そして「先生は海の中の魚で私が飛び込んでいって魚をつかまえるの。」といって盛んにTに飛びつい	（F.P.による自由な感情表出） 今回はplayを開始してすぐにF.P.に入り，paintをたたきつけたり，paintを混ぜたり，素材を自由に使いこなし，そこには独創性とF.P.をすること自体に喜びが見られ，自由な感情表出がF.P.の内容にも，動作にも見られる。F.P.の継起から見ても，とぎれることなく円滑に連続しており，これだけのエネルギーが何処に隠されていたのかと思われる程である。F.P.の時間は30分位費され，計10枚行なっている。それもpaintがすべ無くなったから終了したという感じであり，別なplayへ移っていった。 （写真Fig.10, Fig.11, Fig.12）	この頃はオルガン教室でも大きな動作になり，以前のように緊張してしまって指が動かなくなったりすることもなく，オルガン教室以外の所でも，平気で動けるようになってきた。

治療場面全体の経過	Finger Painting の経過	家庭および学校における症状の変化
てきては，「アー落ちる。」といって奇声を発している。（この遊びはCが後に「水泳ゴッコ」と命名している。） 〔この回はF.P.においても，水泳ゴッコにおいても，Cなりのものをすべて出し，playの場を自由に又創造的にC自身が展開しており，攻撃的な仕方でのTへの接近から素直な水泳ゴッコという形でTとの関係の持ち方を後半には変えてきており，感情表出が自由にできるようになってきている。〕		
第11回 今回はplayが始ると筆とポスターカラーを見つけて絵を描く。茶色の画面下半分の道，赤い花，緑の葉，赤い太陽，青い空と描いていく。先回と比較して元気がなく言葉が少ない。しかし1枚目の終り近くには踵で床をたたいたり，筆についた水をTに振ってかけたりするようなやや消極的ではあるが，彼女なりの仕方でTにかかわってくる。2枚目はTが輪投げの輪を頭の上に乗せ，Cが黒板に得点表を書いている絵を描く。その間，Tの時計に色をぬったり，ポスターカラーを顔につけようとしたりして段々防衛がとれ大胆にTにかかわってくる。描画を終ると，ポスターカラーに指をつっこんで手の跡を作ったり，paintを持ってきて，紙の上で少しぬたくりをする。F.P.は早々に終え，「水泳ゴッコやろう」といって初めは低い椅子を自分から持ってくるが，「もっと高いのでやろう」といって高い椅子を持って来る。Tとの距離が遠いと，「そんなに遠いの」といって飛びついてき，「ウゥー」といって笑顔を見せ，Tの顔を覗きこむ。又「ウーンいいかんじ」とか，椅子の上でゴリラの真似をして胸をたたいたりして見せる。 〔前半の描画とはかなり異って自由な素直な感情表出が見られる。〕	（F.P.への形式的なかかわり） playの中頃にF.P.をやり，そのF.P.も言葉には出していないが形式的であり，少しぬたくりをした程度であり，描画の連続として入ったようである。初期のようにF.P.も描画でなく手の跡をつけたりするものであるが，先回のように大きな動きではない。そしてこだわることなく次のplayへ移っていっている。 F.P.からplayへの移行が自由に，行われるようになったことは，一つの発展の段階を示すものである。　（写真Fig.13, Fig.14参照）	この頃は家で遊ぶことが少なく，友達がよく誘いに来て，外に出ていってしまう。勉強はほとんどせずに徹底して遊んでいる。母親が叱っても，昔みたいにシュンとしないが，聞き流しているようだ。
第12回 playを開始してすぐにpaintの入った洗面器の所に行き，paintを洗面器の中で混ぜたり，全部のpaintを一つの洗面器に集めてこねまわしている。そして，さらにポス	（F.P.への消極的な拒否） F.P.そのものは今回やっていない。paintを洗面器の中で混ぜたり，こねまわしている。なにかC自身がこの素材を必要と感じていないようであり，素材への，又F.P.へ	特記すべき変化無し。

治療場面全体の経過	Finger Painting の経過	家庭および学校における症状の変化
ターカラーを加えるというような動きであり，小さく感情を抑圧し気味であり，paint をTにつけるというようなこともなく，攻撃的な方法によりTにかかわっていくことが統制できてきたように思われる。そして後半は輪投げ，水泳ゴッコと移り，水泳ゴッコになって先回と同様に自由な感情表現が見られるようなった。	の抵抗があるとは見えない。それは次の play へのためらいが出ているのではないだろうか。	
第13回 play に入るとすぐ洗面器の中に手をつっこみ，「手形をつける」といって洗面器の中でこねまわしている。「今回はこれやらないの」といって紙を出してきて財布を作り，そこに顔をクレパスで描き，「先生の顔である。」という。そしてそれに白い髭，赤い帽子をかぶせ，「サンタクロースだ」という。その裏に豚を描き，「これはブタ先生だ。」といって笑う。できあがった財布を「先生にやる。」といってシロホンを打ちに行き，輪投げに移る。黒板に得点表を書き，赤と白の線を引いて，「赤が先生，白が私，運動会でね，白が負けたの。」「そうKちゃんは何やったの。」「玉入と徒歩競走だけど，子供は白が勝ってね，大人は白が負けたの。徒歩競走は2番だったよ。」とかなり積極的に話してくれる。輪投げは初めの1，2回はTとCと同じ距離の的であったが，その後はCはすぐ近くに，Tは非常に遠い机の上にのせる。その的の前でTの投げる輪を取ったり，妨害をはじめ，「先生だめね」といっている。そして時計を見て，「まだ時間あるね」といって水泳ゴッコに入り，距離を段々はなして行き，「キャー落ちる，たすけてー」というようなふざけが続く。又飛びついては鏡に映る自分の姿を見てはニッコリとしている。終了間近になってシロホン，オルガンと移り，Tの「終りにしようか。」という言葉を受け入れようとせず，paint の所へ行き，「せっかく作ったんだから，全部混ぜよう」といって一つの洗面器に集めてこねまわしている。終了の切れが悪い。	(F.P.への負の感情の積極的表現) 今回は開始してすぐ paint の中に手をつっこみ，洗面器の内をこねまわしており，そしてC自身がF.P.をしたくないことをTに告てから次の play へ移っていっている。そして終了近くの5分位の所で「せっかく作ったんだから……」というように，他の play 最中で示したと同じように，F.P.に関しても，Tとの関係の中で，体験をそのまま明確に表現している。	教室ではまだ皆の前で喋る時は声が小さいが，挙手をするようになり，隣の子の頭を紙でたたいたりするような悪戯をするようになった。学校から帰ると友達が呼びに来て，近所でよく遊んでいる。最近は叱られても，以前のように母親の顔を見詰めているのではなく，盛んに返答するようになった。

治療場面全体の経過	Finger Painting の経過	家庭および学校における症状の変化
第14回 playに入るなりpaintに両手を入れてこねまわしながら周囲を見回している。輪投げを取り出してきてTは遠くの的，Cは近くの的という方法で6回程やったが，「やーめた」「先生，買物ごっこしよう」といっておもちゃを取り出す。「先生はやおや」「私はやおやじゃない。」といいながら野菜類はTの所へ，その他は自分の所へと分ける。これもつづかず「やめたー」といいながら戸棚を覗きこみ，ポスターカラーと筆を持ち出してきて絵を描き始める。自分で「紙が大きすぎる」といいながら半分にしようとするがうまくいかず，「先生やって」といってくる。こうして終了を告げるまで絵を描き，その間「ポスターカラーのフタを取って」とか「その赤色取れ」とか「あっ，ちょっとそれ取って」といって盛んにTに命令したりしている。そして時々白衣に色をつけて「今日は最後だからやりたい事をやるんだ。」といっている。終了を告げると，「いいじゃない，少しまけといてよ。」といっていつまでもつづけている。終了を告げてから10分もしてから「せっかく用意したんだから使わなければ悪い」といってpaintを一つの洗面器へ全部集め，こねまわしている。再三再四終了を告げてやっと終る。	今回も先回と同様に最初と最後にpaintに触れ，主なるplayはF.P.以外のものであり，F.P.に関するCのその場の感情を自由に明確に，言葉によってTに伝えている。	今までは妹に敗けずに父親を独占しようと父親にへばりついたりする所が見られたが，この頃は妹と争うことがなくなり，我慢することができるようになった。

Ⅵ　治療過程の分析および考察

1）　治療過程の分析

Table 1　子供の遊びに対する態度のスケール　（A－1）

1. 遊戯室を自己の自由にふるまえる場所としてはぜんぜん認知していない段階。
2. 遊戯室がほかの場所とはことなって自由に行動してよい場所であることを認知しはじめる。
3. 遊戯室がほかの場所とはことなって自由に行動してよい場所であることをはっきりと認知する。
4. 遊戯室の自由さをはっきり認知するが，自己内部の抑制が強く，自由に遊ぶにいたらない段階。
5. 遊戯室で経験された直接の感情が少しずつ見られるが，まだ日常の生活感情に影響を受ける。
6. 遊戯室で経験された直接の感情がかなり自由に表現され，日常の生活感情はあまり影響しなくなる。
7. 遊戯室での経験が自由にそして創造的になされる。その場での感情が否定されることはまれで，たとえ否定されても一時的である。

Table 2　子供の治療者との関係に対する態度のスケール　（A—2）

1. 治療者と自己と無関係な人として認知している。その関係は遠く，なんらかの心理的関係は生じない。
2. 治療者を惑怖と不安で見る。その意味で心理的関係が生じかける。
3. 治療者との関係を恐怖と不安で見ることは減少する。しかし，その関係はやや遠く，自己を開くにはいたらない。
4. 治療者との関係を恐怖と不安で見ることは，まったくなく，少しずつ自己を開くようなる。
5. 治療者への関係は接近し，その関係のなかで経験された感情が表現されはじめる。
6. 治療者との関係は自由で解放的であるが，まだ少し経験を流動的に生き生きと展開するまでにはいたらない。
7. 治療者との関係は自由で解放的であり，なんらの不安も防衛もなく，経験を流動的に生き生きと展開させる。

Fig15　スケールA－1の評価値の変動

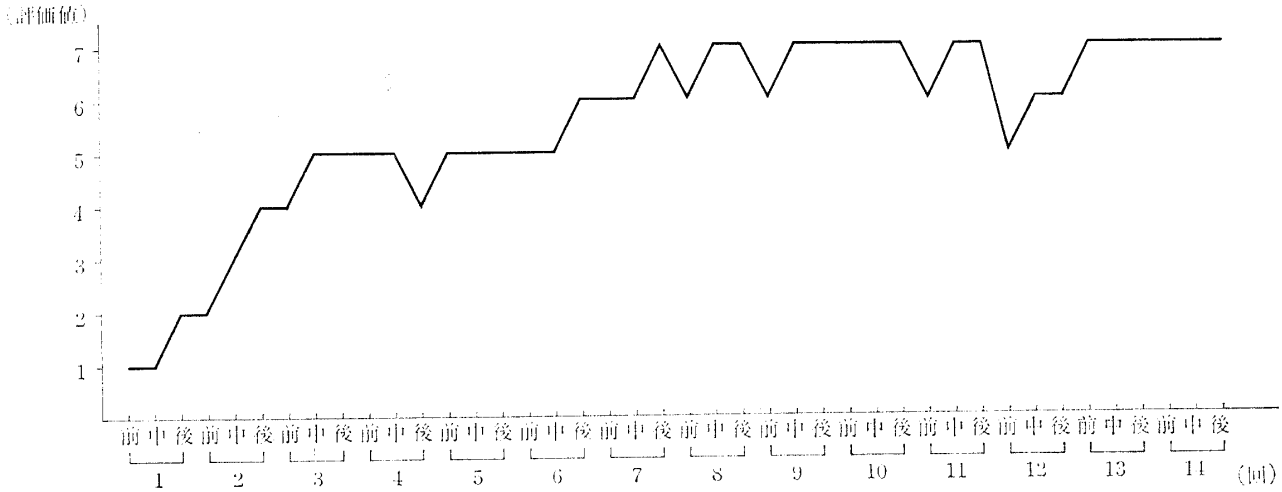


Fig16　スケールA－2の評価値の変動

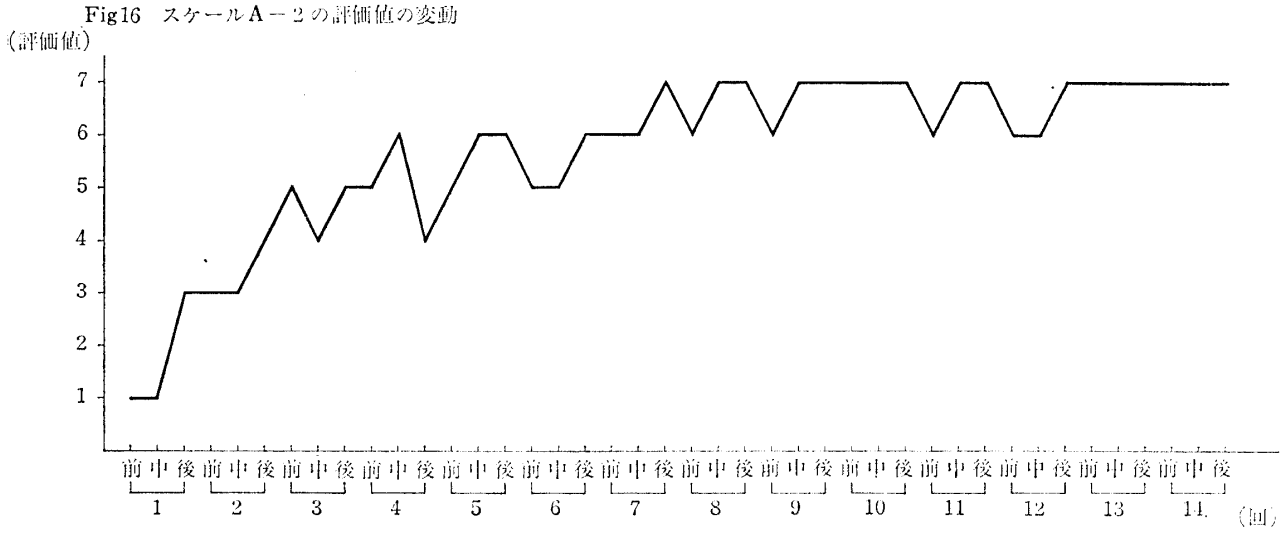


Fig17　スケールA－1の各回の評価値の変動

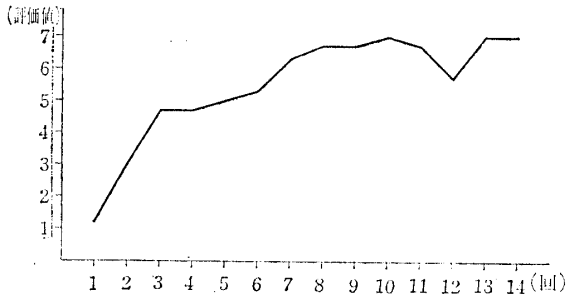


Fig18　スケールA－2の各回の評価値の変動

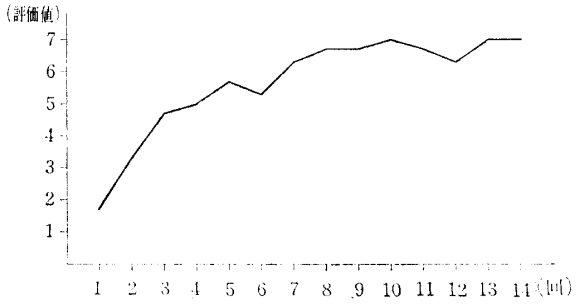


Fig. 3
第1回　6月9日
クレパスによる描画
黄色の太陽と家

Fig. 4
第3回　6月25日
Finger Painting
南極観測船「ふじ」
の絵

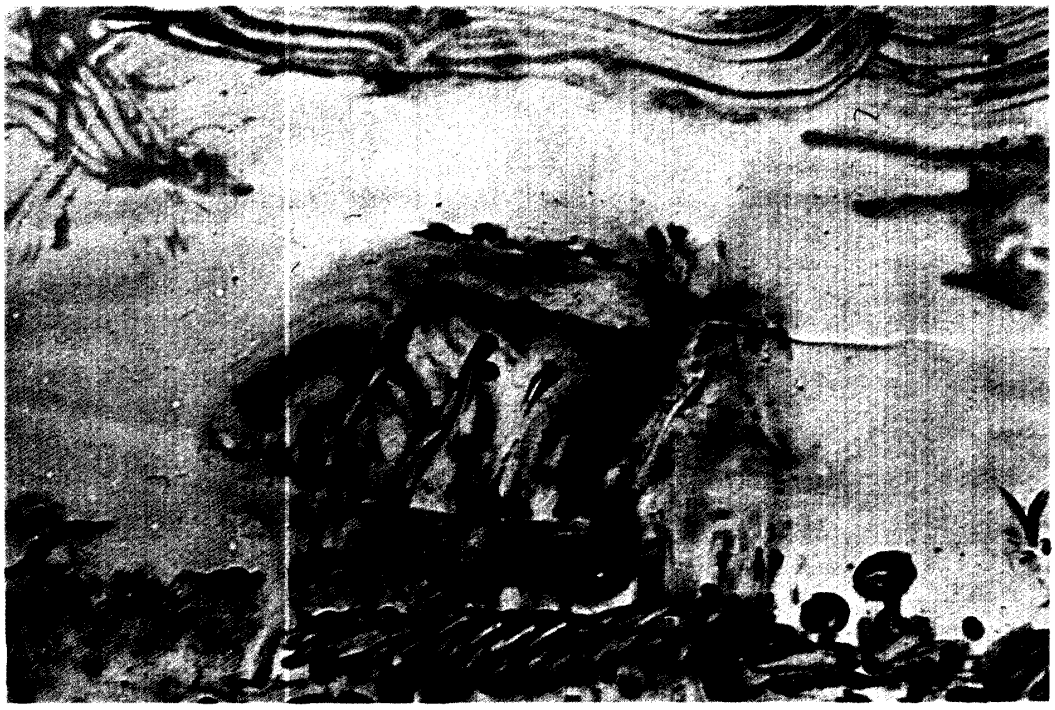


Fig. 5
第4回　7月16日
Finger Painting
家と黄色の太陽の絵

Fig. 6
第５回　７月23日
Finger Painting
南極観測船「ふじ」
と黄色の太陽

Fig. 7
第５回　７月23日
Finger Painting
手形と星、真中は水
をかけて暈す。

Fig. 8
第９回　９月３日
Finger Painting
Paintを混ぜ、上か
らたたきつけ、５指
でひっかいているの
が見られ、手の運動
を楽しんでいる。

Fig. 9
第9回　9月3日
Finger Painting
紙を裏返し、ベニヤにくっつけて模様を作り、その上を平手でこすっている。

Fig. 10
第10回　9月9日
Finger Painting
Paintを上からたたきつけて、飛散するのを楽しんでいる。

Fig. 11
第10回　9月9日
Finger Painting

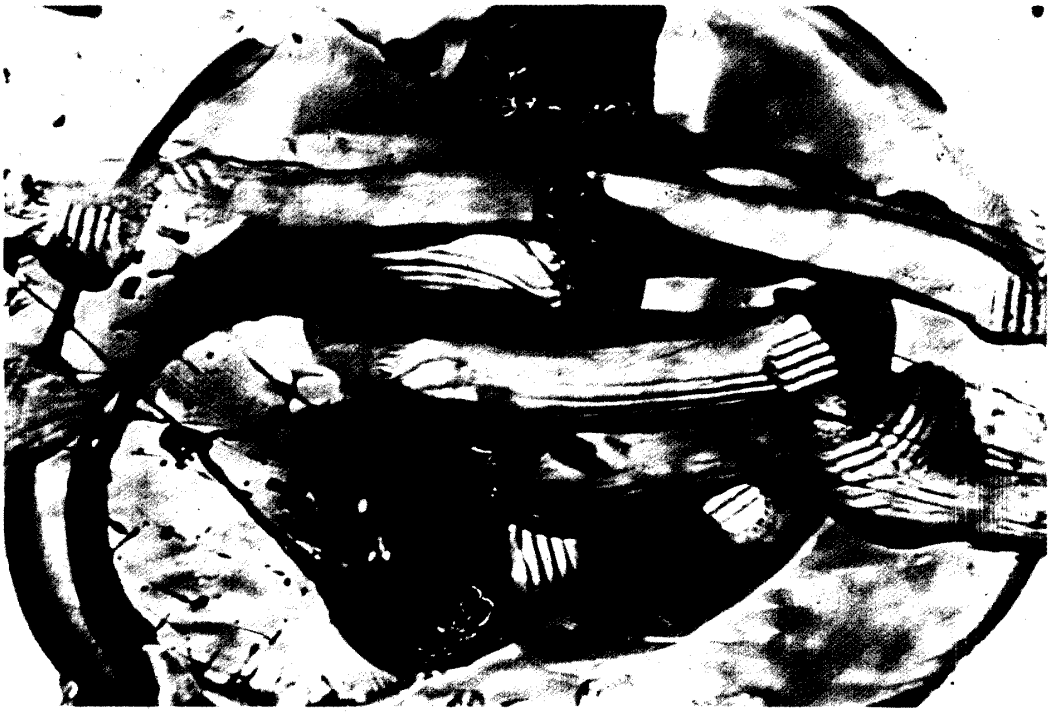


Fig. 12
第10回　9月9日
Finger Painting
Paintを紙面にあけ、その上を洗面器でこすり、さらに土足でその上を滑って遊んだ跡が見られる。

Fig. 13
第11回　9月26日
FingerPainting
紙の上に Paintをあけ、形式的に1度だけ紙面を平手でこすっている。

Fig. 14
第11回　9月26日
ポスターカラー
左端がTであり、Cが黒板に得点を記入している場面、第1回の描画と比較すると紙面の使い方からも、人物の描写からも自由な、のびのびしたところが見られる。

Table 1 と Table 2 は遊戯療法の過程分析をするために畠瀬等(1963)[13] のスケールを参考にし，我々の方で一部修正を加えたものである。Table 1 は子供の遊びに対する態度のスケールであり，Table 2 は子供の治療者との関係に対する態度のスケールである。（以下，前者をA－1，後者をA－2と呼ぶ）Fig15, Fig16, はA－1，A－2のスケールを使用し，治療者が各回を前，中，後，の3期に分け，評定した結果を図示したものである。Fig17，Fig18 は各回の平均を図示したものである。

この4つのFigをみると，clientの遊びの展開においても，治療者に対する態度の展開においても，段階的に明らかな変化を示し，治療の終期では評価値の高い所で安定しており，治療過程としては典型的に変化を示した事例と考えてもよいであろう。この治療者の評定によるclientの変化過程を見ていくと，Table 3 に示されとように6つの時期に区分することができる。

Table 3　Tの評価による client の変化過程

期	回	Tの評価値	
		A－1	A－2
第 Ⅰ 期	1.2.	1－3	1－3
第 Ⅱ 期	3.4.	4	4－5
第 Ⅲ 期	5.6.	5	5
第 Ⅳ 期	7.8.9.10.11.	6－7	6－7
第 Ⅴ 期	12.	5	6
第 Ⅵ 期	13.14.	7	7

第Ⅰ期は2回までの時期であり，遊びに対する態度では，遊戯室を自己の自由にふるまえる場所としてはぜんぜん認知しない段階から自由に行動してよい場所であることをはっきり認知するまでの段階であり，治療者との関係では，治療者との心理的な関係は生じていない段階から治療者を不安で見ることは少ないが，その関係はまだ距離があり，自己を開くにはいたらない段階までである。第Ⅱ期は3回，4回であり遊戯室の自由さをはっきり認知するが，自己内部の抑制が強く自由に遊ぶにいたらず，また治療者との関係は少しずつ自己を開くようになり，経験された感情が表現されはじめる段階の時期である。第Ⅲは5回と6回であり，遊戯室で経験された直接の感情が少しずつ見られ，治療者との関係のなかで経験された感情が表現されはじめる段階の時期である。第Ⅳ期は7回から11回までで，遊戯室で経験された直接の感情がかなり自由に表現される段階からその経験が自由に，そして創造的になされる段階までであり，治療者との関係では自由で解放的であるが，まだ少し経験を流動的に生き生きと展開できない段階から，生き生きと展開させている段階までの時期である。第Ⅴ期は12回だけであり，この回はやや後退した時期と見られる。それは遊びに対するスケール（A－1）では5の段階，治療者との関係に関するスケール（A－2）では6の段階を示している。第Ⅵ期は13回と14回であり，終結期になる。ここでは両スケールともに7の段階であり，前，中，後に変動はなく安定している。つまり遊戯室での経験が自由に，そして創造的になされ，その場での感情が否定されることはまれで，たとえ否定されても一時的である。また，治療者との関係は自由で開放的であり，なんらの不安も防衛もなく，経験を流動的に生き生きと展開させている段階の時期である。

Table 4　各回における前後の評価値の変化

回	評価値の変化		回	評価値の変化	
	A－1	A－2		A－1	A－2
1	↗	↗	8	↗	↗
2	↗	↗	9	↗	↗
3	↗	→	10	→	→
4	↘	↘	11	↗	↗
5	→	↗	12	↗	↗
6	↗	↗	13	→	→
7	↗	↗	14	→	→

↗：評価値の上昇　→：評価値に変化がない。
↘：評価値の下降

各回内における評価値の変動に関して見ると，Table 4からわかるように，前半より後半の方が評価値が上昇している回は，1回，2回，6回，7回，8回，9回，11回，12回であり，A－1，A－2の両スケールとも上昇している。A－1が変化無く，A－2が上昇しているのは5回，A－2が変化無く，A－1が上昇しているのが3回である。A－1，A－2，ともに変化していないのが10回，13回，14回である。4回だけがA－1，A－2，ともに下降している。したがって大部分の回が両スケールともに上昇が見られ，終結期の第Ⅵ期では両スケールともに変化なく，高い値の所で安定していることが見られる。

次に治療場面での変化とclieht の現実場面での適応の変化を検討していくこと，この現実場面での適応に関

する情報は主に母親からのものであるが，第Ⅱ期ではすでに家では明るくなり，よく喋べるようになってきており，友人とも遊ぶようになっている。しかし学校での状態は必要なことは先生に話すようにはなってきたが，まだ挙手をしたり，動作が機敏になる程にまで至っていない。第Ⅲ期に至って母親に甘えるようになってきており，もちろん友達とは外で元気に遊びまわっている。しかし学校での様子は第Ⅱ期と変化していない。第Ⅳ期では毎日外でよく遊び，家にも友人が遊びにくる。母親のいうことをきかなくなり，叱っても以前のようにシュンとすることもなくなった。家庭以外の場面でも，多人数の前で緊張することがなくなり，動作が大きくなった。しかしまだ学校で挙手をすることはできない。第Ⅵ期では，授業中に挙手をするようになり，クラスメイトとふざける程になっている。母親との関係においても，叱られると返答をする程になり，学校場面と家庭場面の両場面ともに自己の感情を自由に表現できるようになった。このように見てくると，治療の経過につれて，まず家庭での適応の改善が第Ⅱ期に始まり第Ⅲ期でかなり改善されて，第Ⅳ期ではうまく適応した状態になっている。これはA－1，A－2の両スケールともに，4から5の段階になって初めて変化が見られることを意味し，又学校場面での変化はこの4から5の段階では変化をしていない。学校場面での変化は最終期に入った，つまり第Ⅵ期にならないと改善は見られない。しかしその前段階として第Ⅳ期に家庭以外の場所での改善が見られている。つまり主なる訴えは7の段階になって改善されている。

2) Finger Painting を中心とした治療過程の分析

Finger Painting による治療過程は client の Finger Painting による感情表現の過程として見ることができるであろう。そこで，まずこの過程の分析は client がどのようにF．P．に入っているか，ということが問題になるであろう。そこでF．P．に関して初回である3回目はTが「これをやろうか」というような導入無しにははいれていない。むしろTのそういうさそいを必要としている段階なのであろう。そのさそいによりCはF．P．にすぐとりかかっている。しかし，そのさそいに対してCは「F．P．をやるか，やらないか」という意志表示はまったく示されていず，無言である。4回はTのさそいに対して「うん」とうなづいており，消極的な形ではあるが意志表示が見られる。この回までは導入後すぐF．P．に入っているが，5回ではTの導入にもなかなか応じることができず，F．P．にかかる前の時間が長い。6回はTのさそいを必要とせず自発的にF．P．の準備して入っていっている。7回，8回はF．P．に入ろうとせず別なplay に入っていっている。11回，12回，13回，14回も同様である。9回は後半に入り，10回は初めから入っていっている。そして自発的にF．P．に入っていったことに関しては6回と同じであるが，9回，10回はF．P．をやるということの意志表示を言語的にも明確にTに伝えている点でことなっており，むしろより主体的にかかわっていると見てよいであろう。

入り方と同様にF．P．の終了の仕方及び次のF．P．への移り方が次に問題になるであろう。3回，4回，5回はTが「終了」ということを判断してやり，終了ということの意志表示の援助をしてやっても，終了がTに告げられない。しかし6回ではその感情表現はまだ弱いが，終了が告げられるようになっている。そして9回，10回では終了を告げる必要性がなく，自主的に次のF．P．の準備をしており，終了の意志表示はまったく自由にできている段階と見てよいであろう。このように終了の仕方と入り方を見てくると，3回，4回，5回，と入り方，終了の仕方にもTの援助が必要であり，その援助があっても意志表示のできない段階であり，play のTの評価の段階で見ると遊戯室で経験された直接の感情が少しずつ見られ，Tとの関係もその関係のなかで経験された感情が表現されはじめる段階である。つまり他の play の中ではそこでの感情が表現され始めているが，まだF．P．には見られていない段階と見てよいであろう。6回ではF．P．のとりかかりは自発的であるが，終了の所では意志表示はできるが，まだ積極性に欠ける段階であり，play 全体のTの評価もA－1，A－2に関して同じように5の段階であり，少しずつ自己を開きつつある段階であり，F．P．と他の play においても同じ段階と見てよいであろう。9回，10回についても同様であり，F．P．の取りかかり，終了の仕方も自由な感情の表現があり，他の play に関しても同様である。

Table 5　Finger Painting にかかわった時間と，その時間的位置付け。

回	時　間	時　期	回	時　間	時　期
1			8	5′	中
2			9	10′	後
3	50′	前.中.後	10	30′	前.中.
4	30′	前.中.	11	10′	中
5	30′	前.中.	12	20′	前
6	30′	前.中.	13	20′	前.後.
7	10′	後	14	20′	前.後.

次に他の play とF．P．の関係の検討をさらに細かく見ていくために，Table 5 は各回のF．P．にかかわった

時間とその時間的位置付けを示したものである。3回はすべての時間がF.P.にあてられ，他のplayには移っていってはいるが，終了の仕方の所で検討したように，F.P.の終了の意志表示ができていず，又他のplayにおいても，感情表現が少ない，つまりF.P.と同じ段階の回である。5回は30分程で他のplayへ移っていっているが，その移り方も3回，4回と同様に意志表示ができていない．しかし移っていった他のplayの中ではF,P.におけるよりもより多くの感情表現が見られている回である。6回は自発的にF.P.に入り，終了にもやや積極性の見られた回であるが他のplayの方が明らかに感情表現が豊かであり，F.P.の場面と他のplayと明白に異った回と見てよいであろう。この6回までは大部分がF.P.であり，移っていったにしてもF.P.から他のplayへであり，治療場面に入ってまずF.P.に当り，そこでは自由に動けていなく，動けるようになったのは他のplayに移ってからである，という段階であろう。7回と8回はF.P.そのものはやっていないのであるが，F.P.とは別な所でそのpaintにかかわった回であろう。その占める時間も非常に短かく，7回は，10分，8回は5分である。その時間的な位置は中頃であったり，後半であったりしている。つまりこの2回はF.P.への消極的な拒否であり，他のplayの中に自由な感情表出がなされ，そこでの体験が意味を持っている回であろう。9回は後半に入ってからF.P.に移っており，他のplayからF.P.に入って，そこでF.P.が展開した回である。これは6回までとはまったく逆であり，F.P.のとりかかり方，終了の仕方においても全く異っている。感情表出から見ても，他のplayにおいてもF.P.においても同じように自由に，そして豊かに感情表出されており，この回になってF.P.と他のplayと同じ水準になったと見てよいであろう。10回はplayの大部分がF.P.に使われ，それも前，中，と使われている。F.P.の後に他のplayへ移っているが，F.P.との他playでの感情表現の水準は同じであり，自由な豊かな柔軟性に富んだものが見られている。11回以降は比較的短いF.P.のかかわりである。11回は中頃にF.P.があり，F.P.そのものは非常に形式的であり，消極的な拒否と見てもよいであろう。しかしまだ積極的に拒否を示す程の感情表現がなされていない。12回においても同様でplayの前半にpaintにかかわっているが，F.P.そのものはしていない。この回も形式的にpaintへ触れているようであり，負の感情の自由な表現がなされていない。しかし13回，14回では明確に拒否をTに伝えており，負の感情の自由な表現が見られる。このようにF.P.へのかかわり方から見ていくと，6回までは消極的な拒否もできないでいる段階であり，7回と8回は消極的な拒否の段階，9回，10回は自主的にF.P.にかかわっていた段階，11回と12回は形式的にF.P.にかかわり，積極的な拒否はできないでいる段階，13回，14回は積極的な拒否を示す段階と見ることができる。F.P.への積極的なかかわりの後に積極的な拒否の表現が出てくることは非常に意味あることであろう。以上F.P.へのかかわり方から分析してきたが，このような過程の展開はF.P.で何が描かれたか，という点からも見られることであるので，以下検討してゆくと，3回と4回は具像的な絵が描かれており，paintは絵を描く道具であるという概念から一歩も出ていなく，C自身の動きから見てもわかるように，固く，小さい。しかし5回，6回では手形という内容の半遊び的なものが出ているが，paintで遊んでいるという段階ではない。そして7回，8回とF.P.そのものはなされなかった時期を経て，9回ではそれまでのF.P.に対する構えとは完全に異って，playの道具としてこなしており，同時に，そこで体験される感情を明確に表現されている。10回においてそれが仕上げられ，多くのF.P.がなされており，正の感情の表現が充分できるようになっている。以降の回では，また具象的なF.P.にもどることなく，徐々に負の感情を明確化し，表現していく過程をとり，14回では負の感情が自由に表現できるようになっていっている。このようにF.P.の内容から分析していくと，具像的なものの段階ではまだCの感情の表現が自由になされていない段階であり，自由に表現できる段階になって初めて，F.P.が遊びに移っていく，という変化がそこには見られるであろう。したがってこの変化が治療終期の一つのindexとなるであろう。

Ⅶ　今後の問題

我々はFinger Paintingを治療場面において他の遊具と等価においた方法をとり，やや異質なFinger Paintingと他の遊具との関係，つまりFinger Paintingへ主体的にかかわっていく姿は強制することなく展開されていくことをねらいFinger Paintingを遊具の一つとしてclientが選択する際の決定権はclient側にあるようにした。従来から一般に用いられているFinger Paintingは，治療場面にFinger Paintingのみをおきclientに対して，強制場面を設定して，その克服過程が治療的意義をもつようにしたものである。その意味で本事例にわれわれが展開した方法とはおのずからことなることが予想される。この両者の比較は，今後

の課題となるであろう。

次に問題となる点は，治療過程の分析にスケールを用い，その分析基準は治療者の評定の客観性に関する問題が提出されてくるのであるが，われわれは，治療場面をビディオテープに記録したものをもとに，教室の臨床研究グループによる評定も試みた。

この結果は，別の機会に譲る。

Ⅷ 要　　約

われわれは，従来の Finger Painting の使用法とことなる遊戯療法の過程の一つとしての Finger Painting の導入法を新たに試みた。

その結果は，遊戯療法の過程分析にもＦ．Ｐ．を位置づけることが出来，Ｆ．Ｐ．のもつ治療的意義に新しい一側面を加えたと考える。

（この事例は，蔭山英順が担当したものであり，本論文の執筆も主として蔭山によるものである。）

参考文献

1) Rambert, M.L. 1947.
Children in Conflict, New York.

2) Alshler, R.H. & Hattwick, L.B.W. 1947.
Painting and Personality, Chicago.

3) Hammer, E.F. 1958.
The Clinical Application of Projective Drawings, Springfield, Illinois, U.S.A.

4) 浅利篤　1947.
児童画の秘密，黎明書房

5) 霜田静志　1963.
性格診断の技術（性格心理学講座３）
６－２　児童画と性格，256－272，金子書房

6) Arlow, J., & Kadis, A. 1946.
Finger-painting in the psychotherapy of children.
Amer. J. Orthopsychiat., 16, 134－146.

7) Napoli, P.J. 1946.
Finger-painting and personality diagnosis.
Gent. Psychol. Monogr. 34.

8) 宮武辰夫　1952.
幼児の絵は生活している，栗山書房

9) 石井哲夫　1955
性格の診断（外林大作著）Ⅵ指筆法　牧書店

10) 中西昇，小西勝一郎，並河信子，1955.
指絵の発達的研究
大阪市立大学家政学部紀要，2，319－329.

11) 中西昇，小西勝一郎，並河信子，1957.
幼児の指絵の人格的診断
大阪市立大学家政学部紀要，5，63－74.

12) 中西昇，小西勝一郎，並河信子，1958
特殊児の指絵について
大阪市立大学家政学部紀要，6，113－118.

13) 友田不二男，伊東博，他編，1968.
わが国のクライエント中心療法の研究178－187
岩崎学術出版社